世界平和・核兵器廃絶を祈る唱題運動の実践報告

（山梨県定林寺住職）　功刀貞如

ご紹介いただきました、山梨県第二宗務所管内、市川三郷町定林寺の住職の功刀でございます。

今日は、私共が行っております、世界平和・核兵器廃絶を祈る唱題運動の実践報告をさせていただく機会をいただきまして、誠にありがたく思っております。常日頃、私は、日蓮宗新聞を見たりしている中で、地道に宗門の中で活動している人達、社会的な活動をしている人達、そういう方々があまり顕彰されていない、また、宗門にもあまり知らされていないという風な状況がありまして、大変さみしいことだと思っております。もっともっと、地方や、各分野で宗門活動をしている、そういう方々を顕彰する中で、宗門が活性化していくんじゃないかなということを思っております。そういう意味において、山梨の片田舎で、こういう活動をやっておりますその活動を、この度、発表させていただくというのは本当にありがたいと思っております。

ここに新間先生がいらっしゃいますが、私は立正平和の会にも所属しております。若い時から、平和運動、特に核兵器廃絶に、力を入れてまいりました。身延山では九カ年間、布教部長を務めさせていただきまして、毎年、学生、山務役員、それから僧道実修生で布教隊を組織しまして、八月六日の原爆記念日を期して、四日に身延山を夜行で発ちまして、五日の朝から夕方まで、広島市内を撃鼓、唱題行進を致しました。その間に、広島・長崎の五十回忌を迎えたり致しまして、大変、盛り上がったわけであります。

身延山の布教部長を辞めまして、すぐ、長年暖めておりましたこの世界平和・核兵器廃絶を祈る唱題運動を開始い

たしました。平成十一年三月に退職を致しまして、四月の二十八日から、始めました。爾来、今年で七年間続けさせていただきました。仏舎利塔等の前で、莫蓙を敷きまして、そして暑い時にはテントを張って、太鼓を打って唱題を致しましたけれども、昨年仏陀ホールが完成を致しましたので、そちらの仏陀ホールで今は行っております。今年の四月から八年目に入りました。大祭の十月はこれは大祭を致しますから唱題会はお休みを致します。今年の三月の二十八日で満七年、七十七回を数えることになりました。その間、参加者の人数も増えてまいりまして、まあ、定着をしてきたんではないかと思っております。最初の五年間を私は、定着期ということに致しまして、ひたすら仏舎利塔の前で太鼓を打ってお祈りをする、唱題をするということに徹してまいりました。

八月には広島へ行き、核兵器廃絶の原点に還って、立正平和の会の皆さんと一緒に、唱題修行をしております。ホテルの都合がありますので、十五名の人達と共に毎年広島に行って、一日断食の世界平和・核兵器廃絶の唱題をさせていただいています。

五年が終わりまして、六年目から、充実期、拡充期ということで、外へ出ることに致しました。外へ出ると言っても、むやみに外へ出てはいけませんので、唱題会に参加しております、教師のお寺、教会等へ、「祈りの行脚」という名前で、出掛けて行くことに致しました。春秋二回、春と秋、春秋二回は外へ行って、そのお寺へ行って、或いは教会へ行って、そのお寺の人達、そのお寺の檀信徒の人達と一緒に、世界平和・核兵器廃絶を祈ろう、ということで、既に四回を終わりました。昨日、第四回目の祈りの行脚がありました。それは、私の町の隣町の鰍沢町です。鰍沢町に妙法神堂というのがあります。そのお堂を守っている望月妙敬という尼僧さんですけども、これが私の弟子でして、毎月大勢の信徒を連れて、この唱題会に参加してくれております。そこの妙敬法尼が「祈りの行脚」を大歓迎を致しますから、ということでしたので、前々から計画を致しまして、昨日の二十八日、鰍沢町の妙法神堂で、することに致しました。しかし妙法神堂はお堂ですから、二、三十人しか入れません。いつもこの祈りの会、唱題会に参

加してるのは、今六、七十人、多い時は百人を越します。それで、じゃ外へテントを張って、唱題会をやろうじゃないかと、こう申しましたらば、雨が降っては困るから、すぐ近くに総合福祉会館という立派な会館があります、そこを借りますからそこでやってくださいということで、近くの総合福祉会館を借りていただきました。その舞台に、大曼荼羅を掲げ、祭檀を整えまして、お堂が近くですから、できれば妙法神さんを、妙法神堂から、ここへ勧請した形で唱題ができるといいねえなんて仕度をしながら言いましたら、いやそれならば妙法神のご神体を、一日移しましょうということで、妙法神さんの二体、妙法両大善神を、そのお曼荼羅の前に移していただきました。妙法神堂というのは小室山の入り口にありまして、小室山の山神を入り口へ勧請して、小室山にお参りする人を守るという意味で、小室山の入り口に妙法神堂ができたのではないかと思います。そこで開催致しましたらば、百人を越える大勢の方々に参加をしていただきました。特に、地元の人達は大変歓迎をしてくれまして、鰍沢の妙法神堂の信者さん達が、こぞってこの唱題会に参加していただいて、また色々な接待をしていただきまして、大変賑やかな、祈りの行脚ができました。既に、今年の秋の祈りの行脚の場所も決まっておりまして、南アルプス市のお寺に行くことになっています。

それでこの実践報告の資料でございますけれども、この最初の報告はですね、五年前に作りました。この度改訂版ということで、改定をさせていただきました。五年前に作ったのは、既に立正平和の会で報告済みでございます。それからまた、岩間日勇猊下や、石川日命猊下達が立ち上げられた布教懇話会という会がありますが、そこで発表させていただきました。しかし五年経ってみますと、色々改定しなきゃならんものがありましたので、この度この現宗研での報告を機会に、改訂版を出させていただきました。最初にご遺文を五編ですね、出させていただいてますが、唱題会には唱題をした後必ずご遺文の拝読を致します。そのご遺文は、毎回色々なご遺文を拝読致しまして、その度にご遺文の解説をさせていただいております。

祈りの行脚の時には、この立正安国論一本でやります。申すまでもなく、立正安国論の根本精神は、日蓮聖人の生涯を貫いている精神であります。日蓮聖人のご生涯はこの立正安国論の敷衍化であり、或いは説明化であり、或いは具体化であり、実践化であった、という風に私は受け止めさせていただいております。そういう意味において、この立正安国論を拝読をさせていただき、開目鈔、観心本尊抄等、世界平和に関連するご遺文を拝読させていただいております。その度に印刷を致しまして渡しておりますから、もう何枚かになっておりますので、世界平和のご遺文という風に、これらをまとめようと思っております。

唱題会は一時間の唱題行で、その間五分の休憩を入れます。一時間の唱題行、三十分の法話、そして後の三十分は茶話会、お茶を飲んで皆さんといろいろお話をするという二時間の日程で行っております。遠くから来る人もありますから、ちょうど一時から三時で、遠くの人も朝早く出てきてちょうど間に合うし、三時に終わりますと、その日のうちに家に帰れますので、二時間の唱題会ということで、第一回からそうしております。

何事をやるにも、何のためにこれをやるのかという理念が大切だと思いますので、この理念づくりを考えまして、こんな風にまとめさせていただきました。六頁になります。世界平和を祈る理念、この三つの信条を、唱題行を始める前に必ず一斉に斉唱を致します。一時ぴったりに印金を入れまして礼拝、礼拝をした後この世界平和を祈る理念を斉唱を致します。そして、お題目を三唱して勧請に移る、という風に致しまして、この理念をしっかりと頭に入れた上で、唱題をするというやり方をさせていただいております。

三つの信条のうちの第一の信条、これは命の尊厳であります。法華経は命の教えでありますので、命の教えが何といっても基本であるということから、その第一の信条をそんな風に謳いました。

第一、世界平和の祈りは、私達ひとりひとりが、ご本物から頂いた尊いいのちに目覚めて天命を知り、世のため人のために、世界平和のために、人事を尽くして生きられるように願う祈りである。という風に、参加した人達に分か

りやすい文章に致しました。続けて読んでいきますと、第一の信条は、私達のいのちの尊厳性を自覚して、生きる目的を明確に持つことを強調しています。私達は久遠のご本仏の仏子であり、私達のいのちの親は法華経如来寿量品の久遠のご本仏であります。どんな人でも、世のため、人のため、家のため、世界平和のために働くように、それぞれご本仏より天命（天授の使命）を頂いて生かされています。世界平和を祈る唱題運動は、世界平和を祈りながら、いのちの尊厳性に目覚める運動であります。いのちの尊厳性に目覚めて、自分の天命を自覚して天命を完うするために精進の力を養う運動であります。その天命を完うするための大目標は、久遠のご本仏のみ心である世界平和・仏国土顕現であります。この大目標を掲げて、自分の使命にいのちを輝かせて、幸せな人生を生きていく運動が、世界平和を祈る唱題運動であります。二十一世紀は、物の繁栄の時代から心を豊かにする時代へと移行することが要請されています。心を豊かにするには、私達の魂を輝かせ、いのちを躍動させることにあります。世界平和を祈る唱題運動は、まさに二十一世紀の時代の要請でもあると、こんな風に、第一の信条をですね、示させていただきました。私達はそれぞれの、職務をもって、それぞれの使命をいただいてこの世に生かされているわけですけれども、どうしても、世界平和というものは遠い、自分達よりも遠いことなんだ、まずは自分達の幸せが大事であって、世界平和なんてことは遠い遠い世界のことだ、という風な考え方が若い人達なんかに持たれております。しかし、世界平和と、私達の幸せというのは一つなんだ、というものをもって初めて、私達の命の輝きというものはあるんじゃないかということをいつも、強調させていただいております。先月、金曜講話で、私はこのお話をさせていただいたんですけれども、まあ色々な話に脱線してしまって、理念のお話までいってなかったもんですから、それで、その理念を説明する意味で、その宝珠の五月号の茶飯事説法で、そこで説明をさせていただき責任を果たしたいと思いました。

先日ですね、この、世界平和のためのラーメン屋さんという話を聞きまして、私は大変感動したんですね。世界平和のためのラーメン屋さん、女の子がラーメン屋さんで働いていて、本当に一生懸命やっているけれどもそれほどの

報酬にはならない、でも、手を真っ黒にして、働いているけれども、自分は世界平和のために働いているんだ、だから、ラーメンを、お客さんに食べていただくのも、喜んで食べていただくのも、それは世界平和のためにやっているんだというような詩が載っておりました。自分の生活が世界平和の目的と一つという、そういう生き方に、私は若い女の子なのに本当に偉いなあ、と感心をしたんです。そういう生活に密着した私共の世界平和の祈り、という風なものを是非実現したいなあ、こんな風に思っております。

私共は幸せに生きていくには、生き生きと生きていかなかったら幸せにはならないわけです。その時に、命っていったい何だろうか、という風な問題が、若い人達にとっては疑問じゃないかと思います。そういう点で、命の問題を五木寛之さんも色々書いておりますが、私は最近作家っていうのは偉いなあと思います。本来宗教家が考えるような問題、つまり如何に生きていくか、命って何だ、幸せって何だ、という風なことを、最近は作家がですね、そういう風なものを考えて書いています。私は命は本心だと考えています。五木寛之さんなんかは魂だっていう言い方をされております。私達が命の問題を説明するには、どんな風にしていったらいいかということをですね、こういう風に実に分かりやすく説明をしておりますと、考えさせられるものがあります。

第二の、世界平和の第二の信条。世界平和の祈りは私達の住所・地球国土の平安と美化を願う祈りである。これは、環境問題を取り上げさせていただきました。世界平和、いわゆる世界平和仏国土顕現、仏国土は、非常に平和で安穏な世界ということで、天災地変のない仏国土を顕現するためには、美しい環境づくりが大切であり、天災地変のない平穏な地球国土、楽しい家庭、きれいな職場を願って精進していかなければならないことを強調しています。天災地変があったり、戦争があったり、テロがあったりして国土が荒れてしまったら、私達の住む所もなくなるし、幸せに生きていくどころではありません。天災地変が続いたり、この地球国土が乱れたりするのは、人の心に原因があります。これは、日蓮聖人が言っておりますように、人の心を見るのは天地の鏡だ、天地の鏡に映して人の心を知る

ことができる、この地球国土が乱れたりするのは、人の心に原因があるというのであります。世界平和を祈る唱題運動は、私達人類が、地球国土の平和で美しい環境づくりのために、娑婆世界の主である久遠のご本仏に心を合わせて生きようとする運動であります。物質文明の進展によって、地球環境破壊は急速に進み、人類の将来に大きな不安をもたらしています。この地球が、平和で水のきれいな地球、緑の美しい地球、安心して生きていける地球にするために努力するのが、私達仏子に課せられた使命であります。それには身辺からの浄化を大切にし、家庭や職場の環境美化に心がけ、私達の住所を平和な浄仏国土に化していこうという運動が、世界平和を祈る唱題運動であります。最初の時はですね、私達の住所というのはなかったんです。やってるうちに、地球国土を大切にするには、私達の身の回りの、或いは家庭の、地域社会の美化、環境整備、という風なものにも目を向けて、そして地球国土の平安という風なものを考えていかなきゃいけないじゃないかということになりました。それで、まず私達は身の回りの整理整頓、それからそれぞれの家の回りの美化、というものを心がけていきましょう、それが世界平和に繋がっていく、地球国土の美化に繋がっていく、という風なことを強調しております。これがですね、この前の実践報告には入っておりませんですが、その後こういう注釈というものを入れさせていただきました。

第二の信条で仏国土のことですけれども、先日ある寺へ伺いまして、この所伺う寺が多いですが、素晴らしく奇麗になってるんですね。草一本生えてない。ご住職に奇麗にしていていいですね、と申し上げたんですけれども、寺はやはり、そういう仏国土の見本にならなきゃなりませんので、私はそれを見ていてほんとにまあ、自分が恥ずかしくなりました。そういうような意味においても、寺は世界平和を祈る場所ですから、奇麗にしなきゃいかんなあ、という風なことを思いました。何のために私達は輪奐の美を整えるかというと、そこを仏国土にするための、輪奐の美ではないかと思います。そういう意味において、寺院の整備はもとより、世界平和のためには、各家庭の美化、それが地球仏国土顕現に繋がっていく、という風に考えております。

第三は、世界平和の祈りは、私達が宇宙の万物と調和して、共に生き共に栄えて、平和で幸せになることを願う祈りであります。これが正に平和です。第三の信条は、宇宙のあらゆる物と調和して、共に生き、共に栄えて、平和でしあわせになるために、菩薩道に生きることを強調しています。菩薩道は礼拝行であります。ご本仏に生かされているいのちを拝みあって、戦争などはしないで、平和で、仲良く、しあわせになろうという生き方であります。人間だけではなくて、この世の全ての物と調和して、お互いに生かしあって、それぞれの天命を完うしようという生き方であります。二十一世紀は、二十世紀の戦争の時代に対し、平和な時代の実現が期待されています。さらに競争の時代から共生の時代、調和の時代を構築することが期待されています。あらゆる社会で多様化の時代に入ってきていて、協調、共存の道が希求されています。特に宗教間対話は、世界平和を実現するという大目的のために、時代の要請でもあります。それにはいろいろな立場を超えて、法華経の菩薩道に止揚していくしかありません。その法華経菩薩道に止揚していく運動が、世界平和を祈る唱題運動であると、こういう風に言わせていただいております。今、世界的に問題になっているのがこの宗教間対立、平和を乱しているのは宗教ではないか、というようなことを指摘する人もいます。この宗教間対話、宗教協力、という大きなテーマを実現していくには、やはり、宗教の目的、それは、神の国の実現であり、仏様の国の実現である、浄仏国土の実現であるという、大目的のために、協力をしていかなくてはならない時代に私は来ているんじゃないかなと思います。この、宗教間対話の中で、宗教を統一していくんだという意見があります。私は統一ということはなかなか難しいんじゃないか、日蓮聖人は法華経が真理だ、この真理に止揚していかなきゃならない、真理は一つ、この真理の一つのものに、止揚して実行していく中に、この立正安国の実現、世界平和が実現するという風に、言っておられると思いますけれども、私は正に、その通りじゃないかなあと思います。同じ目的に向かって、一つの真理に向かって私達は協力していく、私達はお題目を唱えさせていただいて、やがては法華経の真理の中に全てを止揚していくのが世界平和への道じゃないかなあという風に思っております。

宗教者懇話会という会があります。これは、仏教だけじゃなくて各宗教の集まりの懇話会、この歴史はもう古くて、ご遷化されました岩間日勇猊下等が始められた会であります。ですから、三十周年は過ぎまして、その宗教者懇話会が今、いろんな宗教の協力の中で活動を行っております。私は身延を退職致しまして、発会当初から入っておりましたので、会長をやれという風なことで、その宗教者懇話会の会長になりまして今年三年目になりました。毎年一回、「じべた」という機関誌を出しております。それは各宗の先生方が寄稿をしておりまして、その雑誌を各方面へ配っております。全国に、宗教者懇話会がいったい幾つあるだろうかということを調べてまいりました。最初は大変少なかったんですけれども、ここへきて、各県でですね、急速に増えてまいりました。今年、ＷＣＲＰ（世界宗教者平和会議）の総会が京都で開催されます。そのＷＣＲＰの総会に参加するについて、全国の宗教者懇話会の連絡網みたいなものを作りたいなあという風な話がありまして、調べてまいりましたらば、全国で、各宗教の集まりが五十を越えたという、これは大きな数ではないかと思います。その中で、世界平和・核兵器廃絶の運動、宗教間対立、宗教間対話の問題等にこれからですね、色々な形で取り組んでいくんじゃないかと思うんですけど、私は宗教者として、ほんとにやらなきゃいけないことではないかなと思っております。

以上三つの信条による世界平和を祈る唱題運動は、現代社会に生きる私達が、「いのち」の尊厳性に目覚める覚醒運動ではないかと思います。そのいのちの尊厳性を開顕するには、環境が大切であり、平和が大切であることを自覚して、その平和な仏国土顕現のために生きていこうという信仰運動であります。この運動は、まさに現代の立正安国運動であり、宗門の提唱する立正安国・お題目結縁運動と軌を一にするものであるとこう訴えています。昨年より宗門では立正安国お題目結縁運動を始めましたけども、それより先に私共はですね、こういう運動をさせていただいておりましたが、そういう意味において、今度宗門が、立正安国運動を始めたというのは本当に嬉しいことだと思っております。七〇〇遠忌の反省に出した冊子がありますけれども、その冊子に、立正安国は日蓮宗宗門の古くて新しい

命題である、と書かれておりますけれども、その立正安国をですね、お題目総弘通運動にも生かせなかった、立正世界平和もですね、生かせなかったということは、ほんとに、悲しむべき状態だったと思うんです。それが今度こういう形で、新しい運動が展開されるということで嬉しいことだと思っております。

さて、十頁、何故核兵器廃絶か。これは言うまでもないと思います、そこに、幾つかの、問題点を掲げました。この道の権威の新間先生がいらっしゃいますが、そこは読んでいただければいいんじゃないかと思います。とにかく、人類はこういう核兵器を、一日も早く廃絶しなきゃならんですね。これは人類の悲願です。こういう代表的な問題を掲げる中に、世界の色々な歴史的なものが解決されていくと思います。現代の社会状況を見るにつけてもですね、私はもう、核兵器廃絶運動をですね、やはり第一に掲げてやる中に世界平和実現という道が開けていくと思います。今度問題になっておりますイランの問題、それから北朝鮮の問題も全て、核の問題から起きています。そして、アメリカでは新型核兵器がですね、開発製造するために、既に予算化されているといわれています。年二五〇個の核兵器が生産される段階にきているという風なことが言われていますが、それに対抗してかどうか分かりませんけども、先日のロシアのプーチン首相の年次教書の中では、核兵器の近代化を図る、という風なことが演説されています。なにか核兵器競争が始まっているんじゃないかなあと思いまして、これは大変不気味な思いがするわけであります。そういうことにつけても、原爆を最初に経験した日本はですね、やはり核兵器廃絶のために立ち上がる使命があるんじゃないかと思いまして、そんなことをそこに掲げさせていただきました。

一番最後の十三頁の、祈りの運動。祈りの運動は、実際には、現実の運動に繋がらないのではないか、という風なことを言われますけれども、私共宗門の運動は、基本はお題目を唱える唱題運動です。唱題の中に行動が出てきますし、唱題をする中に、私達が如何に行動するべきか、というその行動力が出てくる。その行動こそがほんとの私達の行動ではないかなあと思います。行動のありかたはそれぞれの立場、或いはそれぞれの手段、やり方があり、或いは

形があります。それで、いわゆる、きっちりとした基本を踏まえた行動というようなものが、唱題の祈りの中から出てくるのではないかなあと思いまして、その祈りの運動というものは本当に、行動を起こす基本になるのだという風に考えております。

先日、立正安国論学習会を、仏舎利塔の仏陀ホールで開きました。初めての試みでしたので、どうなるかと思って心配しました。二日間、午前中から、午後の三時半まで、地元の人ばっかりではありません。遠くから来る人も大勢ありました。原則として日帰りで、通いでやりました。十時から三時半まで、初日は開会式もありましたから準備の都合もありまして、十時半からやりました。集まってきたのは四十五名でした。四十五名で、一時間毎に区切りまして、五分から十分の休憩をしまして午前中二時限、午後やはり二時限、全員で立正安国論を音読を致しました。立正安国論の読み下し文を全員で音読しまして、現代語訳を私が一人で原文の意味がわかるように、ゆっくり読みました。その後その内容について解説をしました。二日間で全部読み切りましてですね、あの、読み終えた後の満足感、法悦感といいいますかね、そういう風なものを持つことができて、私も勿論そうでしたけども、参加した人達が大変感激をしてくれました。

その時も私は立正安国論を勉強させていただきまして、茂田井先生の解説の書を読ませていただきました。その茂田井先生が、田辺元さんの日蓮聖人に対する批判を取り上げておりました。その取り上げの中に、私達の人類、社会というものを分けてみると、類と種と個と、こういう風に分けられるけれども、日蓮聖人は類が欠けているというのです。いわゆる種、国民の宗教としては、民族としての国の宗教としては盛んになる、また個人の宗教としては盛んになるかも知れない、だけれども人類としての、世界宗教としてはなりえないんじゃないかというような批判を、田辺元さんがしていると言うんですね。それに対して茂田井先生はそんなことはない、日蓮聖人の宗教こそ正に世界の宗教となる宗教であるから、世界的な宗教として、日蓮聖人のお題目の宗教を広めていかなきゃならん、という風な

ことを書いておりましたが正にその通りだと思います。そういう気構えで、世界平和の祈りの運動を、これからやっていかなきゃいかんのじゃないかな、という風な思いをですね、その学習運動をきっかけに強くいたしました。

さて、十四頁、実践ですけれども、修行の順序は先ほども申しましたが礼拝をして世界平和を祈る理念の斉唱をして、唱題三返して勧請、開経偈、唱題、宝塔偈、御妙判です。この唱題は全員に、うちわ太鼓を持っていただきます。全員でうちわ太鼓を撃ってもらって、そしてゆっくりお題目を唱えます。どうしても大勢ですと早くなりますので、早くなったらば調整をしてゆっくり、四十五分から五十分唱えます。その後宝塔偈から回向、四誓まで、十分から十五分かかりますので、最後に礼拝をして終わります。その間、祈願は世界平和・核兵器廃絶、参加者之面々天命成就・家内安全。それから世界万国戦争犠牲者、広島・長崎原爆犠牲者の塔婆、第二次世界大戦の戦争犠牲者の塔婆を毎月必ずたてて、その回向を致します。中国大同の炭坑の所に行きまして、骸骨がですね、廃坑に累累と積まれていまして、私はもう大変なショックでありました。今は、日持上人顕正会となっておりますが、その当時はその会がありませんでしたので、とにかく個人の名前ではいかんから日蓮宗日中友好会という名前で供養塔を建てようと、お題目の供養塔を建てました。その、大同の犠牲者の霊の供養、その後、これは私の発案でないんですけども、副住職の考えで、地球原住民の犠牲者、アイヌ民族、インディアン民族アボリジニア民族等の供養もさせて頂いております。

この宝珠の四月号に、四月号で宝珠は二〇〇号になりましたけど、その六頁の茶飯事説法という所に、世界平和・核兵器廃絶唱題運動を、人類の罪障消滅と掲げております。今世紀、人類の一番の罪は核兵器だろうと思います。そういう罪障消滅をする意味においても、私達は供養させていただいて、そして世界平和を祈ります。原住民に対しても色々なんですね。現住民を犠牲にしてきているのではないかと思いますね。そういう意味でも人類の罪障消滅、地球人類の罪障消滅という意識を持って、とにかく世界に目を開こう、世界に目を開いて、世界と私達と一つ、そうい

う風な信仰をしなきゃいかんということで、そういう風にやらせていただいております。

参加者の状況は、最初は十八人、それがだんだん増えて、今は六～七十人、普通で六～七十人、多い時は百人を超すという風な状況です。それも参加者は地元だけではありません。各地から、東京方面、関西方面からも参加をしております。その十六頁の所に信仰意識とありますけど、こういうことをやっている中に、色々な信仰心が目覚めてまいります。世界ってどういうことか、世界平和は私の手の届かないことか、色々なことをやってても役に立つのだろうか、太鼓を何故撃つんだろう、広宣流布というけどほんとに広宣流布できるのか、という風なですね、色々な問題が分かってきます。そしてご本仏ご本仏と言っても、それを実感するにはどうしたらいいかという風なこと、戦争犠牲者のことも罪障消滅ですけど、そういう風な問題が、それぞれの心の中で、解決というよりも納得していってくれてるんじゃないかなと私は思っております。そして、今度はジャワの地震がありましたけどその都度、ジャワの地震も早く鎮まって、被災した人達がですね、早く立ち直れるように、犠牲になった人達がどうか成仏しますようにという風なことを、その都度つけ加えております。そういうものが現実的な支援、手を差し伸べるという風な、具体的な形に通じていくんじゃないかなあと思っております。

十九頁の五番目の祈りの行脚は、先ほどお話をした通りです。二十頁の、五十回参加表彰、これは五十回参加した人達に表彰状を差し上げることにしております。立派な、できるだけ立派な表彰状をですね、作って差し上げておりますが、この表彰状はちゃんと額に入れてうちに飾ってですね、誇りに思っているようです。この五十回という参加は、普通の個人の行だけで参加できるものじゃないと思います。人類愛に燃えていないと、また信心に燃えていないと参加できないと思います。そういう風なものを顕彰する意味で、表彰状を差し上げております。

その運動の一環として、世界万国犠牲者の供養塔と唱題道場・仏陀ホールが、一つの形として現れてまいりました。形としての成果というものが出てまいりました。私は七年間、これをやってきて良かったなあと思っています、

これができれば広がって、早く核兵器廃絶大運動がですね、盛り上がって欲しいなあと思っております。

昨年、ＮＰＴの再検討会議に、立正平和の会から、新間先生を団長にして七人参加を致しました。私も参加させていただいて、ニューヨークをお題目を唱えて太鼓を撃って行進させていただきましたが、やはり、このお題目と太鼓というこの祈りをいろんな人が、実践していくことだと思いました。そのお題目と太鼓の力を持ってですね、世界中にやはり出ていかなきゃいけないんじゃないかなあという思いをですね、新たにしました。ちょうど時間になりましたので、一応これで区切りにさせていただきます。どうもご静聴ありがとうございました。